九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

ソーシャルメディアを用いた日本語独習に関する研究 ： 中国語母語話者向けの実践を通して

董, 欣

https://hdl.handle.net/2324/4496120

出版情報：Kyushu University, 2021, 博士（学術）, 課程博士
バージョン：
権利関係：Public access to the fulltext file is restricted for unavoidable reason (2)

（様式６－２）

氏　　名	董　欣
論　文　名	ソーシャルメディアを用いた日本語独習に関する研究 ―中国語母語話者向けの実践を通して―
論文調査委員	主　査　　九州大学　　教授　　松永　典子 副　査　　九州大学　　教授　　郭　俊海 副　査　　九州大学　　准教授　　李　相穆 副　査　　九州大学　　准教授　　杉山　あかし 副　査　　九州大学　　准教授　　田畑　義之

論　文　審　査　の　結　果　の　要　旨

インターネット技術の発展や新型コロナウイルスの流行によるオンライン教育・学習の加速に伴い、教育機関に属さず、ソーシャルメディアを用いて独習している日本語学習者の存在が改めて顕在化してきた。また、スマートフォンやタブレットの台頭により、ソーシャルという概念が一般にも普及し、教室や教育機関以外の場所やコミュニティで日本語を学ぶ学習者に焦点をあてた研究の必要性や教室外のソーシャルメディアを活用したオンライン学習コミュニティに対する研究の遅れが様々に指摘されてきた。しかしながら、従来のソーシャルメディアを用いた日本語教育の実践の多くは大学等の教育機関内で行われたものであり、独習者に焦点を当て、日本語独習の特徴や独習支援の仕組みについて解明することが求められている。

殊に、世界最大規模の日本語学習者を擁する中国では、近年独自のインターネット技術の急成長に伴い、オンライン教育の規模も拡大し、独自の新型オンライン学習形式やプラットフォームも数多く出現している。その一方で、中国本土では海外からのインターネットの制限があるため、中国本土在住の日本語独習者にとっては日本語の知識や日本の情報などの収集に制約が生じている。

そこで、本研究では、ソーシャルメディアを用いて独習する日本語独習者のうち、中国語母語話者に注目し、「独習者、独習内容、独習形態」三つの側面から日本語独習の特徴を明らかにし、日本語独習時におけるソーシャルラーニングの方法及び支援の仕組み構築への示唆を提供することを目的とする。この目的のもと、「日本語独習 LAB」という複数のソーシャルメディアツールを使用したオンライン学習コミュニティを独自に構築・運営し、その実践を通して、課題の解明をはかる。そのために設定した研究課題が以下の 2 点である。

1) 「独習者」、「独習内容」、「独習形式」という 3 つの側面から見た日本語独習の特徴は何か

2) 日本語独習の特徴に基づいたオンライン日本語独習モデルとはどのようなものか

上記、研究課題の解明にあたり、「日本語独習 LAB」により、2019 年 5 月から 2021 年 5 月までの 2 年間にネットワーク構造の異なる２つの実践を実施した。まず、実践①は、主に【WeChat】のページ機能とグループ機能を活用した 1 年間の実践である。実践①実施後のニーズ調査により、学習者はコンテンツの一方的な発信より、即時性のある双方向の交流を重視していることがわかった。このため、実践②は、【WeChat】のグループ機能に加えて、【小鵝通】のライブ機能を組み合わせる改善を加えた上で 1 年間実施した。両者を比較分析することにより、日本語独習の特徴に基づいた日本語独習モデルを導き出すこととした。運営メンバーは、動画コンテンツ作成と週 1 回の

ライブイベントを担当する日本語母語話者講師 A 、音声コンテンツ作成を担当する日本語母語話者講師 B 、グループ内の質問に対応する日本語母語話者 C、グループの日常の管理とトラブル対応及びライブの中国語補助にあたる中国語母語話者アシスタント D と、毎日の日本語クイズを担当する中国語母語話者アシスタント E 、コメント欄の対応を行う中国語アシスタント F から成る。

データ収集と分析に際しては、質的アプローチと量的アプローチの双方を用いた。質的調査では、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いてデータ収集・分析を行った。まず、「グループ」と「ライブ動画」のメディア形式を組み合わせ、参加者（8 人）に対して半構造化インタビュー・参与観察を行った。次に、オンライン日本語独習コミュニティ内の各要素の関連性の分析ツールである「ソーシャルキャピタル理論」に従って分析を行い、日本語独習の特徴を抽出した。量的な調査では、半構造化インタビューの結果に基づいて参加者（138 人）に、選択肢と自由記述双方の項目を設定したアンケート調査を実施し、「日本語独習 LAB」内の活動及び相互作用などを観察することで、ソーシャルキャピタル理論に従いオンライン日本語独習モデルを抽出した。

半構造化インタビュー・参与観察及びアンケート調査のデータを統計分析した結果、課題 1「日本語独習の特徴は何か」について、学習志向の社交動機、共有、参与、信頼・認知、ネットワークという 5 つの側面を持つソーシャル性という特徴が抽出された。これにより、オンラインコミュニティが単に日本語の知識獲得、日本語使用機会となっているにとどまらず、協働学習の場となり得ることを示した。そして独習者には自主的な付き合いや自己成長の意志などの動機づけ、自分を高めるための自律的な学習の行動様式、自ら学習を主導する姿勢があることがわかった。それに加え、講師とのコミュニケーションを通した心の底からの共感ができる知識や考え方へのニーズ、つまり講師の人間性に触れることで得られる感情的なレベルでの交流などに対するニーズがあることを明らかにした。また、日本人講師及び中国語母語話者アシスタントの支援が日本語独習の重要な促進要因となり、学習者同士の交流及び仲間意識が醸成され、それにより、日本語独習のモチベーションを上げることができるということも示唆された。

課題 2「日本語独習オンライン日本語独習モデルとはどのようなものか」については、ソーシャルメディアを活用する場合、「ソーシャルメディア」、「独習者」、「講師・アシスタント」、「コンテンツ」といった各要素が具体から抽象に向かう階層的な段階を経て相互に作用し合うことにより、認知的・感情的なレベルでの相互作用にまで発展することがわかった。

以上のように、本研究は、ソーシャルメディアを用いた日本語独習の特徴として、学習者自らが参加、発信し、参加者間で協働し、人間的に成長していこうとする欲求が独習の前提にあることを実証的に示した。加えて、ソーシャルメディアを用いた日本語独習では、オンラインコミュニティの独習者同士、独習者と日本語母語話者講師及び中国語母語話者アシスタントとの知識・情報のやりとりにおける双方向性及び認知的・感情的なレベルでの相互作用が担保されるネットワーク構造が必要で、それにより独習が促進されることを明らかにした。これらの点は、日本語独習コミュニティの双方向性が知識・情報のみならず感情的なレベルでの相互作用を促す可能性を示唆しており、オンライン日本語独習支援の仕組み構築に新たな知見を提供するものとして、博士（学術）に値する価値ある業績であると判断された。